伊豆市議会　総務経済委員会・教育厚生委員会　合同行政視察報告

小川多美子

海に囲まれた能登半島を襲った地震と津波は、各地に甚大な被害をもたらしました。私たちが暮らす伊豆半島も南海トラフ地震のリスクと隣り合わせであり今回の能登半島の災害は決して他人事ではではありません。

発災から 1 年 9 ヵ月経った今、石川県の七尾市、穴水町、珠洲市、志賀町の 4 市町を視察してきました。

震災直後は、倒壊したり、傾いたり、1 階部分が完全に押しつぶされたりした建物が道路を塞ぎ、至る所で通行できなくなっていたそうです。私たちが伺ったときには、それらの建物は既に公費による解体が進んでおり当時の生々しい様子は、それぞれの役場や市役所のモニター画面で見せていただきました。

建物の倒壊や道路の寸断は画面で見たものの、実際にバスに乗って車窓から見えた大型重機による道路工事が多かったのには、驚きました。

この通行不可の場所が余りに多かったこと、そして能登半島特有の山がちな地形で、道路が各地で寸断されたことにより、非常に多くの孤立集落が発生してしまいました。道路による被害は至る所で通行止めの箇所が多く、移動には大変な時間がかかりました。そのため、命を救うための救助活動や、避難生活を支える支援物資の運搬、そしてインフラの復旧作業に甚大な影響も出ていました。

死者も多く出たようですが、地震や津波による直接死ではなく､関連死による死者が圧倒的に多いというのも驚きでした。

1 月という真冬に起きた地震で、暖房のない避難所や車中泊による低体温症や肺炎、水分や食事の制限でトイレを我慢して脱水症や心筋梗塞、脳梗塞等を起こしての関連死が多かったようです。

蛇口をひねれば水が出る、スイッチを押すと電気がつく、お湯が沸く、車に乗ればどこへでも行くことができる。普段当たり前と思って生活していることは、大規模災害が起こると一瞬にして当たり前ではなくなります。

今回現地でみてきたことをしっかりと肝に銘じ、自分たちの力でなんとかなることは何なのか、日頃から周囲の人たちと話し合うこと、そしてこの教訓を地域へ伝えていくことが、大切だと強く感じました。